

# 仏教・宗教関係書 今年の3冊

平成から令和へと時代を移した2019年。令和元年も残すところあとわずか。時代の変り目を迎え、今年も仏教・宗教研究者に心に残る「今年の3冊」を挙げてもらった。

## 永村 眞 日本女子大学名誉教授 (歴史学)

- ①常盤井慈裕著『善光寺と親鸞―日本仏教史の諸相―』春秋社
- ②岡野浩二著『中世地方寺院の交流と表象』塙書房
- ③安藤弥著『戦国期宗教勢力史論』法蔵館

古代・中世の仏教史・寺院史の分野で注目すべき3冊を紹介したい。

まず①は、東国の真宗門徒に関わりの深い「善光寺と親鸞」を柱にする。副題に掲げた古代・中世の「日本仏教史の諸相」を色づける行基・法然・親鸞・真仏・覚如・存覚・明恵・心地覚心という諸師の足跡について、多彩な史料に依りながら、通説にとらわれぬ斬新な評価を提示する。特に「善光寺の謎を探る」の全六章は、「光三尊仏」と善光寺の起源を端緒として、章を追えば百済・高句麗から河内・信濃へ、帰化人による信仰の姿をたどる。論の展開はダイナミックで、読者はその大胆な流れに引きつけられ読み進めることになる。

次に②からは、畿内・近国から東国・西国に散在する「地方寺院」の広範な存在が知られる。本書では、単に個々の「地方寺院」の歴史的な足取りのみならず、所在地域における寺院としての存在意義に注目し、仏法相承や多彩な宗教活動が検討されており、同様の稠密さで執筆された類書は見出し難い。寺院の通例ではあるが「地方寺院」もまた、その創建の由緒や祖師の存在を掘り所に、後世の存続を図ろうとしており、その指摘は今後の地域史研究に大きな示唆を与えよう。とりわけ筑前国観世音寺の存続に見られる中央・地方の諸寺との関係のなかで、東大寺末寺という枠組みにはとどまらぬ貴重な見解が提示されている。

最後に③の「宗教勢力」との要語は、戦国期における多様な「宗教」のあり方、歴史的な位置づけについて、著者の強いこだわりによるもので、具体的な検討の対象は戦国期の本願寺である。この「宗教勢力」の基盤となるのは、報恩講という儀礼に象徴された宗教活動と、その実現を支えた教団の社会的組織の解明を一貫した課題としている。大冊にわたる本書各章は、各課題ごとに徹底した研究史の整理と、博覧された戦史的史料に基づいて、きめ細かい論証が重ねられており、極めて説得力のある結論が導きだされる。本書は本願寺を中心においた真宗史研究にとどまらず、日本中世史と中世仏教史の接点において掘り所となる貴重な研究成果と言える。

## 川橋 範子 名古屋工業大学教授 (宗教学)

- ①菅原征子著『近世の女性と仏教』吉川弘文館
- ②真宗大谷派解放運動推進本部女性室編『女性史に学ぶ学習資料集』真宗大谷派宗務所
- ③那須英勝・本多彰・碧海寿広編『現代日本の仏教と女性―文化の越境とジェンダー―』法蔵館

①は、11月に惜しくも他界された菅原征子氏が、「女性と仏教 関東ネットワーク」発行の冊子「女たちの如是我聞」に発表し続けてきた、近世の尼僧や女性の禅者・開基の生き方にジェンダー史の視点から光をあてた貴重な研究の集大成である。菅原氏は優れた歴史学者であるとともに、長年にわたり曹洞宗泉龍寺の寺族を務めていた。本書には、近世の女性たちの信仰や宗教活動を鏡として、現代社会に生きる私たちが仏教をジェンダー平等的に再構築していくうえで、の知恵が凝縮されている。菅原氏の願いを継承していくこと、重みを再確認させられる書である。

②この資料集は、大谷派女性室入

タッフと大谷大学の福島栄寿氏が中心となって、大谷派の女性に関する資料を収集し、まとめあげ、解説した労作である。制度の変遷や婦人会の活動、さらには教団の中の女性観など多岐にわたるトピックが取り上げられている。教化・救済される「客体」として与えられた役割を生きてきた女性たちによる自らの解放を願う主体的な生き方を求めた動きが、女性室の開設につながっていく歴史が丹念に解き明かされている。

大谷派女性室が伝統仏教教団の男女「平等参画」をけん引してきたことを実感させられるが、将来的には他の教団でも同様の資料集が編まれることを願う。

③は、仏教とジェンダーに関する先鋭的なワークショップや講演会を開催し続けてきた龍谷大学のアジア仏教文化研究センターの今までの成果をまとめた、画期的なアンソロジーである。近年、日本仏教や僧侶を日本の良き伝統の具現化・体現者であるかのようにほめそやす物言いが流通しているが、本書では「ジェンダー」の視座と海外の仏教者や研究者を交えた国際性という観点からの批判的なまなざしが、どのような人々の声が日本仏教のなかで封じ込められ周辺化されてきたのかを明らかにする。問題意識の共有に向けた最良の手引きであるといえよう。

## 白石 凌海 真言宗豊山派総合 研究院指導教授 (仏教学/インド学)

- ①森章司著(代表)『釈尊および釈尊教団形成史年表』中央学術研究所
- ②高橋尚夫著『維摩経ノート I』Vノンブル社
- ③繁田真爾著『「悪」と統治の日本近代―道徳・宗教・監獄教論』法蔵館

①は立正佼成会、中央学術研究所の釈尊伝研究会が成し遂げた偉業。平成4年(1992)に着手、28年を経てようやく今年度に完成した。〈釈尊の全生涯にわたる年代記〉を明らかにしようとした壮大な構想のもとになされた、その研究成果である。完成報告(11月16日開催)で研究会代表の森章司氏(東洋大学名誉教授)は従来の研究ではまったく見極めることのできなかった事実の数々が明らかにされたことと紹介し、新たな「釈尊伝」執筆の抱負を披露した。研究成果はすでに「モノクラフ」第1号、23号として出版されているが、ウェブサイトに掲載してい

くという。

②は1999年に発見されたサン・スクリット語写本解読作業のために作成された高橋尚夫氏(大正大学名誉教授)による「ノート」全5巻の出版である。サン・スクリット語とその和訳、現存する三漢訳(支謙・羅什・玄奘)、チベット語訳とその和訳三種(長尾・大鹿・河口)、および羅什などの注に加えて氏自身の詳しい補足説明。代表的な大乘経典である維摩経研究にとって必携の書である。原典写本が公開されて以来、『維摩経』の研究は新たな局面に入ったが、「ノート」は仏教基礎学をさらに確かなものとする。ちなみに私(白石)は同「ノート」を頼りに『維摩経の世界―大乘なる仏教の根源へ』(講談社)を考察してみた。

③は教師である善知識から紹介された一書。書名の示すキーワードはいずれも看過できない課題である。思想と実践を切り離さずに両者を総体として理解しようとする繁田真爾氏(日本学術研究会特別研究員、PD東北大学)の研究態度に共感。方法論にM・フーコーの「自己の統治」の着想を援用。かつて私は知の巨人フーコーの肉声に触れた。フーコーの威風があらためて蘇り、宗教が嫌厭される昨今、宗教界に属する私にとってその必要性を見届ける格好な研究分野となる。

以上に注目した3冊の研究は未来を切り開く指針となるのではないかと、ほのかな希望を抱いた。

# 寺尾 英智

立正大学教授

(日本仏教史／日蓮教団史)

①河内将芳著『戦国仏教と京都  
——法華宗・日蓮宗を中心に——』

法藏館

②大谷栄一著『日蓮主義とはなん  
だったのか 近代日本の思想水  
脈』講談社

③望月真澄著『もっと知りたい身  
延山』日蓮宗新聞社

①戦国時代に自立して社会的な影  
響力を持つようになった浄土真宗や  
法華宗・日蓮宗を、戦国仏教と呼ぶ。  
中世仏教が顕密仏教であることを前  
提とし、鎌倉時代に興起した諸宗派  
を新たに位置付けた概念として、近  
年再評価されている。著者は、室町  
期から戦国・中近世移行期における  
京都の都市社会を研究する中で、同  
宗を取り上げてきた。本書では、宗  
派内部の問題や織田・豊臣政権との  
関係を分析し、戦国仏教の特徴は何  
かを追求する。都市研究から見た戦  
国仏教論として、大いに注目され  
る。

②日蓮主義は、伝統的な日蓮仏教

の思想ではなく、近代に形成された  
仏教思想である。右翼から左翼に至  
るまで幅広い人物に影響を与えたこ  
とが知られる。著者は、超国家主義  
と結びついた思想であるとの先入観  
を排し、日蓮主義がどのような思想  
であったのか、幅広い影響力を持ち  
えた理由、さらに近代史における役  
割を、社会的なアプローチから追  
求する。明治の田中智学からはじま  
り、昭和戦前期を経て戦後復興期ま  
で見通した内容は、新たな日蓮主義  
像を提示するものとなっている。

③身延山久遠寺は、日蓮が晩年を  
過ごし、滅後には墓所が営まれたこ  
とで知られる、日蓮宗の霊場であ  
る。本書は、身延山の歴史を、平易  
に紹介する。山内を知悉している著  
者ならではの具体的な話題も各所に  
ちりばめられており、歴史をより身  
近に感じられる構成となっている。  
はじめての読者を想定したクイズ  
「身延山検定」もあり、入門書とし  
て楽しめる構成である。最初の一步  
として薦めたい。